

# □ レコード (CD&DVD)

諸石幸生

2020年の音楽界は、世界が「ウィズ・コロナ」社会にシフトを変え、今できること、今こそやるべきことへの流れが出来つつあった。制約を受けた中で、改めて作品に真摯に向う演奏家たちの、音楽で表現する願い、希望、そして祈りが込められた録音制作は続いた。(イレギュラー)(通常通りではなく例外)な年は、論評もしっかり、その流れを受けた。

2021年のスタートは、何と言っても「ウィーンフィル・ニューイヤー・コンサート」であった。恒例のアンコール曲の演奏の前に、ムーティは約3分間にわたって語った。「私たちは音楽が運んでくれるメッセージを信じて演奏しています。音楽家には武器があります。これは人を殺さない、音楽という武器です。…それはこの社会をより良いものにする。…身体の健康は大切ですが、精神の健康も同じくらいに大切です。この思いを込めて『美しく青きドナウ』を演奏いたします。この美しい曲の音の波の中に、喜びと悲しみが、生と死がいっばいに詰まっていることをお聴きください」と締めくくった。例年であればオーケストラとともに「新年明けましておめでとう！」というところだが、あえて言葉を尽くしたムーティに、楽員たちは譜面台を叩いて賛同の拍手を贈った。音楽は言葉を越えて人と人を結び付ける力があると言われる。しかし、音楽家も生身の人間である。世界の非常時には、言葉に込めたメッセージと共に、音楽の力が一層響くことがあらためて伝わった。いまだ、コロナ禍の11月、ムーティ&ウィーン・フィルは、さらに演奏会開催という決断をした。曲目は、シューベルトの交響曲第4番である。当時は「夏のこない年」と呼ばれ、凶作、飢饉、物価上昇が生じた。この災害が降りかかった時期の作曲である。不安に満ちた人々の心理状態を表現して完成されている。後にシューベルト自身が「悲劇的」と書き加えた。作品全体は、重苦しい悲劇と秘かに芽生えた希望の間を揺れ動いている。同じ時代の出来事が、これ程までにその成立と性格を決定付けた例は少ない。ムーティの的を射た選曲に感服した。その演奏は、オーケストラのパートごとにコンタクトをとり合い、信頼感に溢れており、音楽を支配するのではなく楽員と共に歌い上げるものであった。アンコールはヴェルディの「運命の力・序曲」、その圧倒的な演奏力からくる、沸き立つような音楽力は称賛の拍手と共に、聴き手も大きな希望を与えられた。コロナ禍どこまでポジティブな生き方を模索できるか、今、人間と芸術の力が正に問われているのであろう。

それではここで例年のように「レコード芸術」誌の「レコード・イヤーブック2022」を参考にしながら昨年2021年のクラシックのCDの販売状況を精査してみよう。

	新譜	旧譜(再発)	計
交響曲	167 ( 233)	74 ( 66)	241 ( 299)
管弦楽曲	57 ( 83)	63 ( 35)	120 ( 118)
協奏曲	67 ( 124)	57 ( 39)	124 ( 163)
室内楽曲	101 ( 148)	15 ( 35)	116 ( 183)
器楽曲	221 ( 255)	92 ( 44)	313 ( 299)
オペラ	5 ( 29)	23 ( 18)	28 ( 47)
声楽	55 ( 77)	14 ( 14)	69 ( 90)
音楽史	49 ( 47)	3 ( 3)	52 ( 54)
現代曲	37 ( 35)	15 ( 15)	52 ( 35)
その他	47 ( 57)	8 ( 8)	55 ( 69)
総計	806 (1088)	364 (269)	1170 (1367)

それでは、次に2021年度、第59回「レコード・アカデミー賞」の受賞作を見てみる。

【大賞】は、協奏曲部門で「ブラームス:ピアノ協奏曲第1番、第2番」

アンドラーシュ・シフ (ピアノ&指揮)

エイジ・オブ・インライトメント管弦楽団

世界の一流オーケストラや指揮者の大多数と共演してきたシフは、近年ピアノを弾きながら自らオーケストラを指揮する弾き振りの活動に力点を置くようになっていく。シフ本人、「近年、私たちは重量級のブラームスの演奏に慣れてしまった。ピアノはいっそう強大に、パワフルになり、オーケストラは大規模に、個々の楽器も強く、たくましくなっている。演奏会場は巨大化。ブラームスの音楽は、重たくも、鈍くも、分厚くも、騒々しくもない。そのまったく反対、清明で、繊細で、特徴的で、ダイナミクスの陰影に満ちている。」と。シフが追い求める理想のブラームス作品像になった。

【大賞銀賞】は、声楽曲部門で「J.S.バッハ:ヨハネ受難曲 BWV 245」

バッハ・コレギウム・ジャパン (コンサートマスター/寺神戸亮) 鈴木雅明 (指揮)

ヨーロッパ各国が順次国境を閉鎖されていく緊張した雰囲気の中で、CD録音セッションは、行われた。最終日には、警察官がホールに現れ、幸い、その警察官もBCJの演奏を聞いていたことから活動を理解し、1時間だけ猶予が与えられ、最後まで収録することができた。今回経験した大きな苦難に際し、この世に生きることを意味を、改めて考え直すことを私たちに迫るかのようだった、と振り返る。

【大賞銅賞】は、室内楽曲部門で「ブラームス:ヴィオラ・ソナタ第1番&第2番」

アントワーン・タメスティ (ヴィオラ)

セドリック・ティベルギアン (ピアノ)

ブラームスのソナタを中心に、歌曲のヴィオラ編曲版と、歌にオブリガートのヴィオラ、ピアノが付いた珍しい編成の歌など、「人の声に最も近い」とも言われるヴィオラの魅力が詰まった内容だ。ブラームスは、名クラリネット奏者リヒャルト・ミュールフェルトに影響を受け、クラリネットの名曲を立て続けに書いている。中でも1894年に作られた2曲のクラリネット・ソナタは、ブラームスにとつて最後のソナタであり、自身によってヴィオラ版にも編曲された。情熱的な曲想の第1番、そして哀愁漂う旋律の第2番を滋味豊かに歌うタメスティと、1899年製のペヒシュタインで演奏したティベルギアンの優美な演奏は、ブラームス晩年の境地を見事に描いている。